

モンゴル時代の貨幣



13世紀～14世紀には、東アジアから東欧までの広大な地域がチンギス（orジンギス）汗とその子孫たちの影響下にあった。そのため最近はこの時代を「モンゴル時代」と称することも多い。

この時代の貨幣は、大きく東西に二分することができる。東は中国で発行された貨幣で、主に漢字が記されるが、パスパ文字で漢語を記したのものもある。（パスパ文字については別項の概説を参照されたい。）西はその他の地域（中央アジアおよび西アジアから南ロシアまで）の貨幣で、主にアラビア文字アラビア語、時にウイグル文字モンゴル語が記される。

(1)



(2)



(1) は中国元朝の「至大通宝」。「至大」は年号で1308-1311年。(2) は同じく「至正通宝」。「至正」は1341-1370年。

(3)



(4)



(3) は「至正通宝」の裏面、パスパ文字で「mav」(「卯」の漢字音)と記されている。(4) は漢字がなくパスパ文字のみで「tay-üen-t'üq-bav」(「大元通宝」の漢字音)と記されている。「大元」は年号ではない。

(5)



(6)



(5) (6) はイル・ハン朝 (またはイル汗国) の貨幣で、第4代のカーン (またはハーン / 汗) であるアルグンの発行したもの。(5) はウイグル文字モンゴル語で「カーンの名において、アルグンの打たせたる [貨幣]」と記され、右端にアラビア文字で「アルグン」と記されている。13世紀のウイグル文字モンゴル語資料は数が少ないため、イル・ハン朝のモンゴル語貨幣は書体や正書法の研究にとっても非常に価値のあるものである。(6) は(5)の裏面、アラビア文字アラビア語で中央にイスラムの定型句「アラーの他に神なし、ムハンマドは神の使徒なり」が記され、周辺に「バグダードで684(694?)年に打たれた」と発行地と発行年が(イスラム暦で)記されている。

(7)



(8)



(7) はキプチャク汗国の貨幣。中段にウイグル文字で、この貨幣の発行者たるカーンの名「ジャニ・ベグ」とある以外は全てアラビア文字アラビア語である。アラビア語銘文は上段「公正なるスルターン」、下段「ジャラルール・アル・ディーン・マフムード」(ジャニ・ベグのイスラム名)と記されている。(8) は裏面で、「新サライーで743年に打たれた」というアラビア語が記されている。

イスラム文化圏の貨幣は、誰がいつどこで発行したかを明記する点において、歴史資料としての価値が高い。(イスラム貨幣については Mitchiner(1977), *The World of Islam*. London: Hawkins Publications. を参照) 一方、中国の貨幣は正確な年代は分からないが、通常は年号があるため、発行者とおおよその時期は見当が付く仕組みである。なお、裏面にパスパ文字で干支が記されている場合には年代が確定できることもある。(3) の「mav」は「卯」であるが、「至正」は30年間あるため、これだけでは確定できない。

イル・ハン朝とキプチャク汗国では、ウイグル文字の記されないアラビア語銘文のみの貨幣も多くある。当館ではまだ入手していないが、チャガタイ汗国で発行されたものは全てアラビア語銘文のみが記された貨幣のようである。貨幣を眺めるだけでも、当時のイスラム文化の広がりを実感できる。

この項目は中村雅之が担当しました。